

小さな巨人 緒方貞子 ～命をつなぐ現場主義～ 「小さな巨人緒方貞子さんの生きざま」

収 録 「小さな巨人 緒方貞子さん 運命の分岐点」を聴取して 2023.10.10.

NHK BS アナザーストーリーズ

小さな巨人 緒方貞子さん 運命の分岐点 を聴取して

2023.10.6. NHK BS の番組を見て 記録を残しておきたい

From Kobe Mutsu Nakanishi



小さな巨人 緒方貞子 ～命をつなぐ現場主義～

放送日: 2023 年 10 月 6 日

ボスニア内戦、ルワンダ虐殺…

世界で難民が苦しむとき、その現場にはいつもこの小柄な女性の姿があった。

UNHCR・第8代国連難民高等弁務官、緒方貞子。

過酷な現場に自ら足を運び、解決のためならどんな相手ともきげんと立ち向かうその姿は“小さな巨人”と呼ばれた。

緒方のかたわらにはいつも彼女に心を動かされ、ともに闘った人々がいた。

命をつなぐために、緒方はどんな闘いに挑んだのか？ 黒柳徹子との知られざる交流も。

国連の前難民救済高等弁務官 「小さな巨人緒方貞子さんの生きざま」に感動して、

食い入るように番組を視聴しました。

「命は宝」・「現場主義」 よく使う言葉ですが、「現場主義・命は宝」の行動を身を持って見せてくれた人

この種の番組ではよく出逢うオーバーな演出もなく、

事実を赤裸々に積み重ね、きっちりと緒方氏の生きざまを きっちり伝えてくれた番組でした。

国際情勢は厳しく混乱の時代 判断力が問われる時代に

絶えず「理念」「行動」の原点を説き、おごらず、独りよがりにならず、

現場で 多くの人の先頭に立ち、難局を切り開いて行く姿勢に感動

日本にありがちな短所「ご都合・付和雷同」を廃し、

たえず現場で難局に立ち向かい、日本もやることが沢山あると言い続けられた姿も印象的でした

2023.10.6.夜 by Mutsu Nakanishi

【参考】 緒方貞子さんの業績とプロフィール 転記採録 2023.10.10.

YAHOO! ニュース
JAPAN

10/6(金) 18:01 はるママさん 子育てに役立つ本のソムリエ

NHK アナザーストーリーズが特集する

緒方貞子さんの華麗な経歴と、壮絶な生い立ちとは?! より

<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/2dd952e3b86af4a9cf98f53e5bc62bc07388338b>

ちょっと長く 感傷的な文面でしたが、緒方貞子さんの歩まれた道

「誕生から2013年 国連本部での「人間の安全保障」についてのスピーチ」までの活動記録が年次ごとにまとめて記録されており、緒方貞子さんの活躍の「命をつなぐ現場主義」の実像がよくわかるので、そのまま収録させていただきました。

2023.10.10. Mutsu Nakasishi

2023年10月6日放送のNHK番組「アナザーストーリーズ 運命の分岐点」では、UNHCR・第8代国連難民高等弁務官、緒方貞子さんにスポットライトが当てられます。

ボスニア内戦、ルワンダ虐殺…世界で難民が苦しむとき、その現場にはいつもこの小柄な日本人女性の姿がありました。アナザーストーリーズの予告を見て、「緒方貞子さんについて詳しく知りたい！」と居ても立っても居られなくなった私は、近所の図書館に走り、「緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で」という本を発見。

そして、緒方さんの華麗な経歴と険しい道のりに驚愕。貪るように一気に読み終えて、彼女が「小さな巨人」呼ばれる理由が、よくわかりました。

この記事では、私が「緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で」を読んで感銘を受けたエピソードを中心に、緒方さんの壮絶な生い立ちから、2013年 国連本部での「人間の安全保障」についてのスピーチまでを、ご紹介します。



誕生～戦争の時代～終戦へ

1927年 東京で、外交官の中村豊一・恒子夫妻の長女として生まれる「貞子」と命名したのは母方の曾祖父で、第29代内閣総理大臣を務めた犬養毅。緒方さんの祖父は、長年外交官を務め、犬養内閣では外務大臣を務めた芳澤謙吉。親戚が集まると、団らんの場に政治の話題が頻繁に出るような家系の出身です。

1930年 父・豊一がサンフランシスコの日本国総領事館に赴任するため、母・恒子、弟・豊二とともに家族そろってアメリカに引っ越す。当時の入国記録が残っていて、3歳目の緒方さん、身長は約81センチでした。

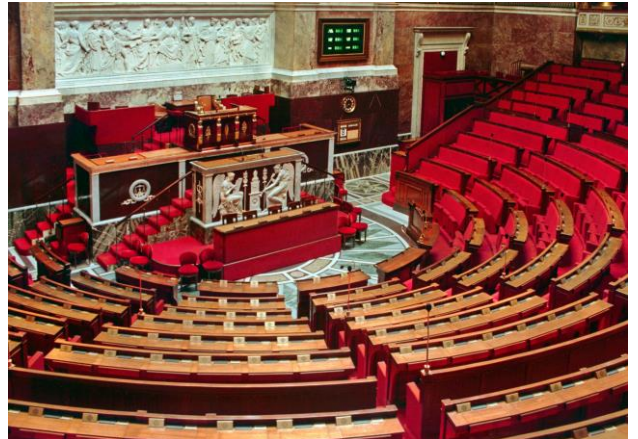
1932年 五・一五事件 曾祖父・犬養毅が、軍事政権の樹立を目指す青年将校たちによって、暗殺されてしまう。4歳だった緒方さん、戦争へとひた走る日本の不穏な空気を感じざるを得ない状況でした。

1935年 父・豊一が中国・福州で総領事を務めることになり、再び太平洋を渡る。8歳になる頃の緒方さん、アメリカとは違う異国の文化にびっくりしたそうです。福州を1年で離れ、広州、香港と転勤が続きました。

1939年 父・豊一が外務省の電信課長になり、日本へ帰国。緒方さんは、先に帰国し、聖心女子学院に入学していました。小学5年生の時です。当時は、外務省の中に住んでいて、緊迫した電話のやりとりを、ちょこちょこ耳にしていたそう。

1941年 真珠湾攻撃により、太平洋戦争へ。緒方さんがこのニュースを聞いたのは、聖心女子学院の体育館で、跳び箱を跳んでいるとき。中学2年生でした。「とうとうこうなったのか」という感じだったそう。

1945年 東京大空襲を経験、終戦へ。緒方さんは、庭の防空壕にいて無事でしたが、聖心女子学院の校舎が焼夷弾の直撃で炎上。この戦災下、卒業式が行われ、その後、家族とともに軽井沢に疎開しました。軽井沢で終戦を知り、「自分の国がもし全部負けたら…。負けた国はどういうことになるのかな」と思ったそうです。



戦後～青春時代～学問に励む

1948年 聖心女子大学に一期生として入学、英文学を専攻。初代学長エリザベス・ブリッドからリーダーシップについて学びました。「自立しなさい！知的でありなさい！協力的でありなさい！」というのが、マザー・ブリッドの言葉。青春時代の緒方さんに、大きな影響を与えたひとりです。

1951年 既習科目の一部が単位として認められ、大学を3年で卒業。その後、アメリカへ留学

マザー・ブリットや、外交官だった父・豊一に背中を押されて留学を決意。

ロータリークラブの奨学金をもらうための試験に、この年に合格したのは、緒方さん、ただ一人だったそうです。名門・ジョージタウン大学、大学院の修士課程で国際関係論を学びました。

日本で英語ができるといっても、アメリカで論文を書くのは大変だったそうです。

また、アメリカの豊かさを目の当たりにして「どうして戦争をしたのか…」という疑問が深まりました。

1953年 日本に帰国し、東京大学の特別研究生に

ジョージタウン大学の大学院で修士論文を書き終えた緒方さんは、理論の裏付けとなる歴史の事実関係を深く学ぶため、岡義武教授のゼミで、近代日本政治外交史を学びました。

1956年 カリフォルニア大学バークレー校で政治学原論と国際関係論を学ぶため、2度目の留学
政治学の理論研究に惹かれ、「助手にならないか」と大学から声もかかっていたのですが…

1958年 父・豊一の病気の知らせがあり、留学を中断し、帰国

父の病状が安定すると、カリフォルニア大学に提出する博士論文を書くため、満州事変の研究に乗り出しました。この論文は、のちに日米両国で出版され、今でも満州事変に関するポピュラーなテキストとなっています。

論文のタイトルは「満州事変と政策の形成過程」。

「幼少期を米国や中国で過ごし、曾祖父から祖父、そして父親まで、中国・日本・米国の外交問題に係わったことも踏まえて決めたテーマ」でした。

結婚～子育て～学問を続け、国連へ

1960年 33歳で結婚、長男誕生 結婚のお相手は、日本銀行に勤務する、同じ年の緒方四十郎さん。

四十郎さんの父・緒方竹虎は、朝日新聞で主筆を務めた後に政界に入り、国務大臣や副総理まで務めた人物です。なんと恋愛結婚で、緒方さんが出した結婚の条件は「(緒方さんが)学問を続けること」でした。

1967年 長女誕生 子育てと学問に懸命に取り組む

国際基督教大学と聖心女子大学で非常勤講師として、日本外交史と国際関係論を教えていました。

子育てでいちばん大変だったのは、授業の準備をするために、子どもを早く寝かせることだったそうです。

1968年 緒方さん40歳、突然の国連総会デビュー

婦人運動家として知られ、当時参議院議員であった市川房枝先生が、突然、緒方さんを訪ねてきて「ニューヨークの国連本部で行われる国連総会に参加してほしい」とオファー。

悩む緒方さんに、父・豊一は「ああでもない、こうでもない可能性を論じているより、まず出席すると決めて、それから人を探しなさい、方法論を考えなさい」と言いました。

「みんなでやれば何とかなるから、行きなさい」と父に背中を押され、緒方さんは子どもたちを預けて、ニューヨークへ旅立つのです。そして3カ月にわたり、国連総会の第三委員会に参加、社会・人権・文化問題について各国の代表と議論を重ねました。

国連総会参加を終えて、3カ月ぶりに娘と再会した緒方さん。まだ赤ちゃんだったため、お母さんの顔を忘れてしまったようで、「忘れられた」と言って、涙をこぼしました。やっぱり一人の母親です。

1976年 国連公使としてニューヨークへ

「公使として国連日本政府代表部に赴任することはできないか」という外務省からの申し出があり、正式に赴任が決定。夫・四十郎さんが日銀ニューヨーク事務所に駐在参事として転勤しており、長男と長女もニューヨークで暮らしていたため、偶然にも環境は整っていました。

1979年 任期を終えて帰国後、外務省の依頼で難民問題に取り組む

カンボジア難民の救済視察団団長としてタイに赴きました。

4日間の現地視察。タイとカンボジアの国境地帯で、直接、多くの難民の姿を目にし接した体験が、その後、UNHCRで難民問題に正面から取り組むことになる緒方さんの関心や考え方に、大きな影響を与えました。

1980年 上智大学の教授となる。一方で国連の仕事に関わり続けました。

1982～1985年 国連人権委員会の日本代表を務めました。

1983～1987年 国際人道問題独立委員会の委員を務めました。

地道に、人権問題や人道問題への関心を継続させ、思索を深めています。

1983 年 日本の若者向けに「模擬国連」を組織化

模擬国連では、日本全国の大学生、大学院生を中心とする参加者一人ひとりが、世界各国いずれかの大使となり、各国の立場になって、実際の国連会議で扱われる問題を話し合います。

ここから実際に、国際社会の舞台で活躍する人材も、多く輩出されているそうです。

1990 年 国連人権委員会の特別報告者としてミャンマーを訪れる

人権問題や、人権の考え方について、ミャンマー政府と話し合いの道筋をつけてくるのが、緒方さんのミッションでした。

「やっぱり、軍事政権の人たちと話をつけるだけでも大変なことでしたね」と語っています。

難民問題、人権問題に正面から取り組む

1991 年 第8代の国連難民高等弁務官となる

子育てが一段落して、母親の介護も十分果たし、すでに看取っていた緒方さん。

「日本は、もっと国連ポストに人を輩出すべきである」自ら語っていたので、

外務省からの打診を受け、国連難民高等弁務官後任候補となりました。

各国の候補者が次第に絞られていき、国連事務総長から直接、就任を依頼する電話があったそうです。

国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)は、人道的見地から、紛争や迫害によって故郷を追われた世界の難民の保護と、難民問題の解決に向けた国際的な活動を先導し、調整する任務を負っています。

そして、緒方さんは10年の在任期間中、前例のない決断を次々と下していきました。

最も有名なエピソードは、イラクでのクルド人難民問題でしょう。

トルコから受け入れを拒まれた40万人のクルド人が、イラク国境の山間地に取り残され立往生。

絶望の淵に追い込まれました。

しかし、UNHCRの活動の基本となる難民条約では、国境を越えて自国を出ていない人は、支援の対象外。

簡単に彼らを救うわけにはいかなかったのです。

緒方さんは、直ちにヘリコプターで現場を訪れ、1日中歩き回り、クルド人避難民の方の話を聞きました。

「どこから来たのか」「いつ来たのか」「なぜ、ここに来たのか」「どんな希望を持っているか」。

今度是对応を協議するため、ジュネーブの本部に戻り、2時間以上にわたって全ての幹部の意見に根気強く耳を傾けた緒方さん。決心して、こう言いました。

「私は、介入することに決めました。なぜなら UNCHR は、被害者たちが国境を越えたかどうかにかかわらず、被害者たちのもとに、そして側にいる必要があるからです」

最も難しい問題に直面し、解決策を即決。見事なリーダーシップでした。

この決断の意味・重要性は、クルド人の問題にとどまらず、その後まもなく起きた旧ユーゴスラビア紛争でも、この方針が活かされました。

緒方さんの勇気ある決断が、非常に多くの国内避難民の命を救うことになったのです。

2000 年 3期10年にわたった国連難民高等弁務官の職を退く

緒方さん、73歳。しかし、まだまだ引退ではありませんでした。

2001 年 日本政府の依頼で、アフガニスタン支援総理特別代表に就任

UNCHR時代にやり残した仕事という思いもあり、現地にも足を運びました。

その後、外務大臣就任の依頼もありましたが、夫の健康が悪化していたこともあり、辞退。

2003 年 国際協力機構(JICA)の理事長に就任

新天地 JICA でも、前例にとらわれない改革を次々と行いました。

また、職員に対して、「世界の中にある日本」と「世界の安定と繁栄が日本の安定と繁栄にもつながること」を意識するよう求めたそうです。

2013 年 国連本部でのスピーチ。緒方さん、85歳

「人間の安全保障」に関する特別イベントに招かれ、国連事務総長の挨拶に続いて、スピーチを行いました。

書籍「緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で」にスピーチの全文が掲載されていますので、

興味のある方は読んでみてくださいね。

緒方さんが、難民支援に当たる中で着目し、その後一貫して追求してきた政策的概念が「人間の安全保障」。

「安全保障とは、従来、国家がすべきものということを前提に考えられてきたのですが、もはや国家を超えて、『人びと』というものを、保護の対象にしていくことを考えないといけないのです」と緒方さんは語っています。いかがでしたか？

私は、緒方貞子さん生い立ちや経歴を知って、「これが天命というものなのか！」と強く感じました。緒方さんが生まれた環境、育った時代、共に生きる人びと、奇跡のような偶然が積み重なって、「人間の安全保障」を追求する道に、導かれていったのでしょうか思えません。

緒方さんの語る言葉には、「名言」と呼べるものが沢山ありました。

私が、その中で特に好きだと思ったのは、緒方さんが多様性についてお話している時の、この言葉です。

「“異人”という言葉。あれ、”異なる人”と書くでしょう。人間を見るときには、本当はにんべんの”偉人”でなくてははいけないのですよ」

【参考文献】緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で

小山靖史・著 NHK 出版

最後まで読んでいただき、ありがとうございます

緒方さんに貰かれた強い信念と、深い思いやりが、少しでも伝わったなら幸いです。

本資料作成ブロックの主 はるママさん 子育てに役立つ本のソムリエ

読書量 3,000 冊以上、読書歴 30 年!現在 6 歳娘と 4 歳息子の育児奮闘中。アラフォーのママ

◎ はるママの最近の記事 インターネットより

【自己啓発】幸せになるのに夢は必要!悩みだらけの現代で「本物の夢」の見分けるに 10月12日

【自己啓発】人間関係が上手くいく人は知っている!嫌いな人のことで悩むのをやめる超合理的な方法とは! 10月9日

「情熱大陸」出演の寺島しのぶさん。子どもの頃は歌舞伎コンプレックス!その意外な理由とは 10月8日

ほか

なお NHK BS 「小さな巨人 緒方貞子さん 運命の分岐点」の再放送ほか緒方貞子さんの活動動画や緒方貞子さんに関する書籍や文等インターネット検索で沢山出てきますので、ご興味のある方は そちらもご参照ください。



日本人初の国連難民高等弁務官 緒方貞子さん



国連難民高等弁務官就任当時 ©UNHCR/E.Brissaud

日本人初の国連難民高等弁務官

緒方貞子さんは、日本人で初めての国連難民高等弁務官として、1991年から2000年まで10年間の任期を務めました。

緒方さんは1927年東京都に生まれ、幼少期をアメリカ、中国、香港などで過ごしました。聖心女子大学卒業後アメリカに留学し、ジョージタウン大学で国際関係論修士号を、カリフォルニア大学バークレー校で政治学博士号を取得。

その後、74年に国際基督教大学準教授、80年に上智大学教授に就任。76年には日本人女性として初の国連公使となり、その後91年には日本人として、また女性として初の国連難民高等弁務官に就任しました。

緒方さんが高等弁務官に就任した1991年は東西対立構造がもたらした冷戦が終わりを告げ、民族、宗教などに起因する地域的な紛争が増え続けていた時期でした。

クルド人難民救済の新しい枠組み

緒方さんの就任時期に、湾岸戦争が勃発しました。それを機にイラクのクルド人が武装蜂起し、制圧しようとするイラク軍から逃れるため、わずか4日間のうちに180万人のクルド人がイランやトルコの国境地帯に逃れました。

そのうち40万人のクルド人がトルコの国境に向かって避難しましたが、トルコ政府が入国を認めなかったため、国境地帯にとどまることになりました。当時、UNHCRでは国内避難民の保護は直接的な任務ではなかったため支援を行うべきかが議論になりました。しかしながら緒方さんは人道的視点から、そして人命を守るため、彼らを保護し支援することを決断したのです。

短期間にできる限り多くのUNHCRの職員が集められ、すぐにイラクに派遣されました。そして冬を迎えようとする中、クルド人の出身地である北イラクにUNHCRは難民キャンプを設営しました。また、キャンプの治安維持のためイラク北部の駐留期間を延長するように米軍に要請しました。

この時、緒方さんは人道的見地からそれまでの難民保護の考え方を超え、新しい支援の枠組みを作り出したのです。

バルカン紛争—銃弾の中の人道援助



1993年サラエボを訪問 ©UNHCR/Sylvana Foa

ユーゴスラビア連邦からスロベニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナが分離独立したことにより、1992年ボスニア紛争が始まりました。ボスニアにはセルビア系住民、クロアチア系住民、イスラム系住民が暮らしていましたが、独立をきっかけに民族対立が深刻化し内戦となったのです。

UNHCRはまずボスニア政府と交渉して、サラエボ市民に食糧の空輸を行いました。ところが、飛行場に届いた物資を町までトラックで運ぼうとすると、ボスニア政府はその道路を封鎖し、UNHCRによる物資の輸送と配布を妨害したのです。

サラエボ市内のセルビア系の地域にはイスラム系が多く暮らす一帯がところどころにあり、UNHCRはそうした場所も含め

て物資を輸送しようと試みました。しかしそのためにはセルビア系が輸送を妨害しないよう、終始交渉しなければならず、輸送は遅々として進みませんでした。この状況に対し、ボスニア政府はサラエボへの道路を封鎖することでイスラ

ム系により多くの物資が届くように仕向けたのです。

そこで緒方さんは、もし道路を封鎖するのであれば、サラエボを含めて、セルビア人勢力支配下のボスニアにおける全ての救援活動を直ちに一時停止すると発表しました。人道支援が政治的に利用されることを回避するためでした。紛争下の混乱した状況においても、緒方さんは常に冷静に 人道支援を政治的な思惑から引き離すよう努めました。

ルワンダ－難民キャンプの治安維持



1995 年ルワンダ難民の子どもたちと ©UNHCR/Panos Moutzis

ルワンダでは 1994 年フツ族過激派によるツチ族の虐殺が起こり、わずか 4 ヶ月でおよそ 80 万人が虐殺されました。

さらに 24 時間で推定 25 万人のルワンダ難民がタンザニアへと流出し、8 月までにザイール（現コンゴ民主共和国）、タンザニア、ブルンジ、ウガンダなどへ 200 万人が逃れました。

ザイールのゴマに 100 万人規模で流入したルワンダ難民を支援するため、UNHCR はザイール国境沿いのゴマに難民キャンプを設営し、そこで食糧支援を行いました。

キャンプに逃れる難民の中には武装集団に居た人々も混ざっており、最大の難題はキャンプの

治安をいかにして守るかということでした。

そのため緒方さんは治安維持のための協力を国際社会に何度も訴えましたが、その要請に応えてくれる国はありませんでした。非常に危険な任務であり、また、かつて武装集団に所属していた人々を保護するということに対する議論があったためです。緒方さんは、ザイールのモブツ大統領の親衛隊とアフリカ諸国の仕官に訓練を施し、難民キャンプの治安維持にあたってもらうことに成功しました。武装集団だった人々を支援することに対し倫理的に疑問を感じ、活動を引き上げる団体もありましたが、その中でも UNHCR は難民保護活動を継続していきました。

緒方さんの実績と成果



1993 年ケニアの難民キャンプを訪問 ©UNHCR/Panos Moutzis

緒方貞子さんは「人命を救うための最善の選択」という基準のもと、現場の状況に応じて柔軟に判断を行ってきました。

また、強力なリーダーシップのもと、UNHCR の緊急事態即応体制を強化し、各国政府の支持をとりつけ救援物資を輸送する大規模な空輸作戦を展開しました。これは UNHCR 史上初めてのことでした。

同時に緒方さんは、こうした救援活動が人道主義の名のもとに政治的に利用されることに断固として抵抗し、紛争の恒久的解決を目指して国際社会に積極的な関与を求めました。

難民問題と平和構築には深い関係があることを世界中に訴え続けたのです。

緒方さんは 2000 年に国連難民高等弁務官を退任してからは、総理特別代表としてアフガニスタンの復興支援をしながら、2003 年 JICA 理事長に就任、開発援助、復興支援に携わりました。

2012 年に退任した後も JICA 特別フェロー、名誉顧問として国内外で活躍しました。

プロフィール／緒方貞子



1999年スイス・ジュネーブ本部で

© UNHCR/Anneliese Hollmann

1927年東京生まれ。聖心女子大学文学部卒業後、アメリカに留学し、ジョージタウン大学で国際関係論修士号を、カリフォルニア大学バークレー校で政治学博士号を取得。

74年国際基督教大学（ICU）准教授、80年上智大学教授に就任。

76年、日本人女性として初の国連公使となり、特命全権公使、国連人権委員会日本政府代表を務める。

91年より第8代国連難民高等弁務官として難民支援活動に取り組む。

2000年12月退任。01年より人間の安全保障委員会共同議長、アフガニスタン支援日本政府特別代表、国連有識者ハイレベル委員会委員、人間の安全保障諮問委員会委員長を歴任。

03年～12年、独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長。

享年92歳。

<参考文献>

「共に生きるということ」緒方貞子著（PHP研究所、2013年）

「紛争と難民 緒方貞子の回想」緒方貞子著（集英社、2006年）

東京 2019年10月29日 © UNHCR 訃報 緒方貞子さん プレスリリース

第8代国連難民高等弁務官を務め、UNHCRを1991年から2000年まで率いた緒方貞子氏のご逝去がご遺族より報告されました。フィリップ・グランディ国連難民高等弁務官はご逝去の報に接し、

「ミセス緒方は先見の明のあるリーダーでした。

UNHCRの歴史における重要な局面において、激しく変動する世界情勢のうねりのなかで、紛争、民族浄化、ジェノサイドによって移動を強いられた何百万もの人々が生き延び生活再建を図るために、人道支援がどうあるべきか、再定義した人物でもありました。生涯を通して国際貢献に献身し、私たちの“連の友”であり続けました」

とコメントしています。

冷戦終結後、世界が新たな分裂と統合に直面し、何百万もの人々が住み慣れた土地を追われていた時に、緒方氏は国連難民高等弁務官に就任しました。

UNHCRは国連難民高等弁務官であった緒方氏の指揮の下、旧ソビエト連邦、イラク、バルカン諸国、ソマリア、アフリカ大湖地域、東ティモールなどの大規模な緊急人道危機に対応し、中央アメリカ、アフリカやアジア各地で行われた大規模な難民帰還事業にも携わりました。また難民・国内避難民を保護するために、UNHCRとして初めて紛争地域における活動にも着手しました。緒方氏は尊敬すべき日本の学術研究者であり、多国間にかかわる交渉にも長けた外交官として、そして、難民への理解と連帯を求める代弁者として、政治的な対話や和平プロセスにおいて、世界各地で起こっている強制移動の解決を提唱するべく飽くなき挑戦を続けました。

緒方氏は国連難民高等弁務官の任務を離れてからも、難民問題、そして国連と親密に関わり続けました。

「人間の安全保障」の理念を掲げた先駆者でもあり、国際協力機構（JICA）の理事長として、開発援助が強制移動の解決に貢献できるようにも尽力しました。

UNHCR職員一同、緒方氏のご遺族、日本政府、日本国民の皆様の深い悲しみに対し、謹んで深い哀悼の意を表します。

<UNHCRについて> 国連の難民支援機関であるUNHCRの活動を支える日本の公式支援窓口

1950年設立。難民、国内避難民、無国籍者などを国際的に保護・支援するため、世界約135カ国で活動を行っています。シリア、イラク、アフガニスタン、南スーダン、コンゴ民主共和国、バングラデシュなどで発生した人道危機においても、最前線で支援を実施。1954年、1981年にノーベル平和賞を受賞。本部はスイス・ジュネーブ。